

臣(しん)、安寓侶(やすまろ)が言(まを)さく、
それ、混元(こんげん)すでに凝(こ)りて、
氣象いまだ效(あらは)れず。
名もなく、為(わざ)もなし。
誰(たれ)かその形を知らむ。

しかれども、
乾坤(けんこん)初めて分かれて、
參神造化の首(はじめ)となり、
陰陽ここに開(ひら)けて、
二靈群品の祖(おや)となりき。

このゆゑに、
幽顯(いうけん)に出入して、
日月目を洗ふに彰(あらは)れ、
海水に浮沈して、
神祇(じんぎ)身を滌(すす)くに呈(あらは)れき。

かれ、
太素(たいそ)は杳冥(えうめい)なれども、
本教によりて土(くに)を孕(はら)み嶋を産みし時を識(し)り、
元始は綿邈(めんぱく)なれども、
先聖によりて神を生み人を立てし世を察(し)りぬ。

まことに知る、
鏡を懸(か)け珠(たま)を吐きて、
百王相続し、
劔(つるぎ)を嚙(か)み蛇(へみ)を切りて、
万神 蕃息(はんそく)せしことを。

安(やす)の河(かわ)に議(はか)りて、
天(あめ)の下(した)を平らげ、
小浜(をばま)に論(あげつ)らひて、
国土(くに)を清めき。

ここをもちて、
番仁岐(ほのくにぎ)の命(みこと)、
初めて高千(たかちほ)の嶺(みね)に降(くだ)り、
神倭(かむやまと)の天皇(すめらみこと)、
秋津嶋(あきづしま)を経歴したまひき。

化熊(くわゆう)川を出でて、
天劔(てんけん)を高倉(たかくらじ)に獲(え)、
生尾(せいび)経(みち)を 遮(さきき)りて、
大烏(たいう)吉野(えしの)に導きき。

儻(まひ)を列(つら)ね賊(あた)を攘(はら)ひ、
歌を聞き仇(あた)を伏(したが)へたまひき。

すなはち、
夢（いめ）に覚（さと）りて神祇（じんぎ）を敬（みやま）ひたまひき。
このゆゑに賢后と称（まを）す。

烟（けぶり）を望みて黎元（れいげん）を撫（な）でたまひき。
今に聖帝と伝ふ。

境を定め邦（くに）を開きて近（ちか）つ淡海（あふみ）に制（をさ）め、
姓（かばね）を正し氏（うち）を撰（えら）ひて遠（とほ）つ飛鳥（あすか）に勒
（をさ）めたまひき。

歩驟（ほしう）おのもおのも異（こと）に、
文質同じくあらずといへども、
古（いにしへ）を 稽（かむが）へて、
風 猷（ふういう）をすでに類（すた）れたるに繩（ただ）し、
今に照らして、
典教を絶えむとするに補はずといふことなし。

飛鳥の清原（きよみはら）の大官に、
大八州（おほやしまくに）御（しら）しめしし天皇の御世に暨（いた）りて、
潜龍（せんりょう）、元を体し、
洊雷（せんらい）、期に応じき。

夢の歌を開きて、
業を纂（つ）がむことを相（おも）ひ、
夜の水（かは）に投（いた）りて、
基（もとゐ）を承（う）けむことを知りたまひき。

しかれども、
天の時いまだ臻（いた）らずして南山に 蝉蛻（せんぜい）し、
人事 共給（そなは）りて東国に虎歩したまひき。

皇輿（くわうよ）たちまちに駕（か）して、
山川を凌（こ）え度（わた）り、
六師（りくし）雷（いかづち）のごとく震（ふる）ひ、
三軍 電（いなづま）のごとく 逝（ゆ）きき。

杖矛（ぢやうぼう）威（いきほひ）を挙げて、
猛士烟（けぶり）のごとく起り、
絳旗（かうき）兵（つはもの）を 耀（かか）やかして、
凶徒瓦のごとく解けぬ。

いまだ浹辰（せふしん）を移さずして、
気沴（きれい）おのづからに清し。

すなはち、
牛を放ち馬を息（いこ）へ、
愷悌（がいてい）して華夏（くわか）に帰り、

旌（はた）を巻き戈（ほこ）を戢（おさ）め、
儻詠（ぶえい）して都邑（といふ）に停（とどま）りたまひき。

歳（ほし）大梁（たいりやう）に次（やど）り、
月 俠鐘（けふしよう）に踵（あた）り、
清原（きよみはら）の大宮にして、
昇りて天つ位に即（つ）きたまひき。

道は軒后（けんこう）に軼（す）ぎ、
徳は周王に跨（こ）えたまひき。
乾符（けんぷ）を握（と）りて六合（りくがふ）を捻（す）べ、
天統を得て八荒を包（か）ねたまひき。

二気の正しきに乗り、
五行の序（つぎて）を齊（ととの）へ、
神理を設（ま）けて、俗（ならはし）を奨（すす）め、
英風を敷きて、国を弘めたまひき。

しかのみにあらず、
智海は浩汗（かうかん）として、
潭（ふか）く上古を探り、
心鏡は焯煌（みくわう）として、
明らかに先代を覩（み）たまひき。

ここに、天皇の詔（の）りたまひしく、

「朕（わ）が聞けらく、
『諸家の費（も）てる帝紀および本辞、すでに正実に違（たが）ひ、多く虚偽を加
ふ』
ときけり。
今の時に当りて、
その失（あやまり）を改めずは、
いまだ幾年をも経（へ）ずしてその旨滅びなむとす。
これすなはち、
邦家（はうか）の経緯（けいゐ）、
王化（わうくわ）の 鴻基（こうき）ぞ。
かれこれ、帝紀（ていき）を撰録（せんろく）し、
旧辞（きうじ）を討覈（たうかく）して、
偽（いつはり）を削（けづ）り実（まこと）を定めて、
後（のち）の葉（よ）に流（つた）へむと欲（おも）ふ」

とのりたまひき。

時に、舎人（とねり）あり。
姓（うち）は稗田（ひえだ）、名は阿礼（あれ）、
年はこれ廿八（にじふはち）。
人となり聡明（そうめい）にして、
目に度（わた）れば口に誦（よ）み、
耳に払（ふる）れば心に勒（しる）す。

すなはち、
阿礼に勅語（みことの）りして、
帝皇の日継（ひつぎ）および先代の旧辞を誦（よ）み習はしめたまひき。

しかれども、運（とき）移り世異（かわ）りて、
いまだその事を行ひたまはざりき。

伏して惟ふに、
皇帝陛下、
一を得て光宅し、
三に通じて亭育したまふ。

紫震（ししん）に御（ぎょ）して、
徳は馬の蹄（つめ）の極まるところを被（おほ）ひ、
玄 扈（げんこ）に坐（ざ）して、
化は船（ふな）の頭（へ）の逮（およ）ぶところを照らしたまふ。

日浮びて暉（ひかり）を重ね、
雲散りて烟（けぶり）にあらず。

柯（えだ）を連ね穂を并（あは）す瑞（しるし）、
史（し）書（しる）すことを絶たず、
烽（とぶひ）を列（つら）ね訳（をさ）を重ねる貢（みつぎ）、
府（ふ）空しき月なし。

名は文命よりも高く、
徳は天乙（てんいつ）にも冠（まさ）りますといひつべし。
ここに、旧辞の誤り忤（たが）へるを惜しみ、
先紀の 謬（あやま）り錯（まじ）れるを正したまはむとして、
和銅四年九月十八日をもちて、臣安萬侶に詔（みことのり）して、

「稗田の阿礼が誦（よ）める勅語（みことのり）の旧辞を撰録して献上（たてまつ）らしむ」

とのらししかば、
謹みて、
詔旨（おほみこと）のまにまに子細に採（と）り撫（ひり）ひつ。

しかれども、
上古の時は、
言（ことば）と意（こころ）とみな朴（すなほ）にして、
文を敷き句を構ふること、
字におきてはすなはち難（かた）し。

すでに訓（くん）によりて述べたるは、
詞（ことば）、心に逮（およ）ばず、
またく音（おん）をもちて連ねたるは、
事の趣（おぼふき）、さらに長し。

ここをもちて、今、
あるは一句の中（うち）に音・訓を交（まじ）へ用ゐ、
あるは一事の内にまたく訓をもちて録（しる）しつ。

すなはち、
辞理の見えがたきは注（ちう）をもちて明らかにし、
意況（いきやう）の解（さと）りやすきはさらに注せず。

また、
姓におきて、日下（にちげ）を玖沙訶（くさか）といひ、
名におきて、帯（たい）の字を多羅斯（たらし）といふ。

かくのどとき類は、本（もと）のまにまに改めず。

おほよそに記すところは、天地の開闢（かいびやく）より始めて、
小治田（をはりだ）の御世（みよ）に訖（おは）る。

かれ、
天（あめ）の御中主（みなかぬし）の神より下（しも）、
日子（ひこ）波限建（なぎさたけ）鵜草葺不合（うかやふきあへず）の命（みこと）より前（さき）を、
上（かみ）つ巻となし、

神倭伊波礼 毘古（かむやまといはれびこ）の天皇（すめらみこと）より下、
品陀（ほむだ）の御世より前を、
中（なか）つ巻となし、

大雀（おほさざき）の皇帝（みかど）より下、
小治田の大宮より前を下（しも）つ巻となし、

并（あは）せて三巻（みまき）を録（しる）して、
謹みて献上（たてまつ）ると、
臣（しん）安萬侶（やすまろ）、
誠惶（かしこみ）誠恐（かしこ）みも頓々（のみ）首々（まお）す。

和飼五年正月廿八日
正五位上勲五等 太朝臣（おほのあそみ）安萬侶